

46. 高齢者開腹手術における心肺機能の検討

(第二病院 外科)

○薬師寺公一・芳賀 駿介・小川 健治・
菊池 友允・成高 義彦・熊沢 健一・
清水 忠夫・勝部 隆男・松本 紀夫・
大石 俊典・飯田 富雄・梶原 哲郎・
榎原 宣

近年、70歳以上の高齢者胃癌症例を多く経験するようになった。これら高齢者に対し全身麻酔による開腹術を施行した場合、69歳以下の症例に比して高頻度に発症し、死亡原因ともなるのは術後肺合併症である。70歳以上の症例と69歳以下の症例の間に、術前から心肺機能に差があるのかを知るため、以下の検討をこころみた。

胃癌19例を70歳以上の高齢者群9例(A群)と69歳以下の群10例(B群)とに分け、心エコー、Swan-Ganzカテーテル法、動脈血ガス分析を行なった。

術前心エコーではB群の拡張末期容積 $115.2 \pm 25.9 \text{ cm}^3$ に比し、A群 $91.9 \pm 34.6 \text{ cm}^3$ と差はないが、心拍出量でB群 $5.91 \pm 1.28 \text{ l/min}$ に比し、A群 $3.97 \pm 1.16 \text{ l/min}$ と有意の低下がみられた ($p < 0.05$)。

Swan-Ganzカテーテル法では、2群とも術中の中心静脈圧の値が術前値より高く、術直後から術後1日目にかけて最低値を示し、2日目から3日目にかけて回復するという傾向を示し、差はみられなかつた。肺動脈楔入圧では術直後軽度の低下がみられるものの術後1日目には術前値に回復し、2群間に差はみられなかつた。肺動脈圧は、術中A群に術前値よりの上昇がみられるが、術後数時間内に術前値に回復し、術後3日目に再び上昇がみられた。心拍出量は、A群の術前値が心エコーによる結果と同じく低値を示し、術中は両群ともに低下した。この低下はB群では術後1日目に術前値に回復し、術後3日目には術前値の104%に上昇したが、A群では術前値への回復が2日目に遷延し、3日目の上昇は129%であった。

動脈血ガス分析では、術後3、5日目の PaO_2 の低下がA群で顕著であった。

このように、高齢者では術前的心肺機能が悪く、術後の回復は遷延し、臨床的な術後肺合併症の発症とよく一致するよう思われた。肺合併症予防にはこれらのことに留意したきめ細かな治療が必要と考えられる。

[特別講演]

感染症と妊娠

(産婦人科) 大内 広子

産科領域において母体の感染症で問題となる主なるものには、風疹、サイトメガロウイルス感染症、HBウイルス感染症、トキソプラズマ症、細菌感染症、結核感染症などがある。

母体の感染症合併は、感染時期によつて、流・早産、子宮内胎児死亡、低体重児出生、また胎児への垂直感染を起こし、ときに先天性異常児の出生をみることがある。とくに最近風疹の流行が多発することにより、妊娠初期の罹患は先天性風疹症候群発生の危険が大きい。

母体の感染症が胎児および新生児にみられる垂直感染は、経胎盤と経産道が主な感染経路である。

今回私はトキソプラズマ、サイトメガロウイルスについての教室の基礎的、臨床的研究を発表し、感染症併発例の先天性異常児発生子防のために大切な妊娠、分娩管理についてのべる。

[シンポジウム]

“医学教育に何を望むか”

はじめに

(司会) (第二生理) 菊地 鏡二

医学教育については少なくとも卒前卒後教育について討議されるべきであるが、本シンポジウムでは、本学における卒前教育を中心に、6名の演者が話題を提供することになる。

既に本学においては、教務委員の御努力によつて更に手直しが行なわれ、一応カリキュラム改訂は終了すると予想される。しかし、教育には種々の要因が関係するので、中々一定のカリキュラムを制定し、長い間施行することは、進歩を止めることにもなり得る。一方、古い方法でも捨て難い良い方法もありうる。司会者としては、こうした教育方法の細部について余り深入りするつもりはない。むしろ聴衆の方々の思い切つた発言をうながして、この討論会の雰囲気盛り上げたい。演者、教務委員の方々にも遠慮のない御意見を期待したい。

更に、この女子医大で青春の数年を送る学生諸君のために、困難であるが、有意義な、しかも楽しい一時期であるように、この討論が教育のテクニカルな面だけに止まらないことを望み、この点でも一寸触れる方がおられ